ロングステイ横浜

にっぽん丸による世界一周クルーズ

本郷台分会
佐藤 文炳・史子

昨年4月10日から7月11日までの90日間の世界一周旅行に出かけた。10年くらい前から、日本近海での短期クルーズやアラスカクルーズなどの海外クルーズの経験はあったが、世界一周はもちろんはじめてである。

今回乗船したにっぽん丸は1990年9月に竣工した3代目で、2009年秋から2010年始めにかけて改修された。日本の客船では飛鳥Ⅱの5万トン、ぱしふぃっくびいなすの2・7万トンに次ぐ大きさである。

当初のコースはスエズ運河、地中海、北米、パナマ運河、ハワイのコースであったが、ソマリア沖での海賊問題のためスエズ運河航行が不可能になり、ケープタウン回りに変更された。このコース変更と3・11の東日本大震災の影響で乗客のキャンセルが多く発生し、結局、乗客は120～130人と思われた（営業政策上乗客数は公表されていない）。乗客はリピーターが結構多く、世界一周12回目の人は別格としても2回目以上の人も多く、また男性の一人参加も目立った。一方、乗組員・スタッフが214名と贅沢な旅であった。なお、東日本大震災の影響で横浜港での出港セレモニーは省略された（左の写真は、横浜大桟橋にて、いざ出発!!と意気込む二人）。

（1）今回のクルーズの動機、目的、期待など

翌日、神戸からの乗客を乗せ一路シンガポールを目指した。今回のクルーズは我々夫婦にとって海外旅行の一つの区切りと位置づけた。また、飛行機利用の旅行ではなかなか味わえないアマルフィ、サントリーニ島の景色を海側から眺めること、パナマ運河をじっくり観察しトコトン感動すること、水平線での日の出・日の入りをしっかり眺望すること、時々刻々変化する海水の色の変化を観察すること、クジラ、アザラシなどの海洋生物を眺めること、南十字星などの星座で感動を得ることなど、盛りだくさんの期待と目的を持って乗船した。

（2）長期クルーズの心配、懸念材料

クルーズ旅行も長期間乗船となれば、いろいろな心配、懸念材料もある。

まず第一に自分、同伴者、家族、親戚などの健康状態、3カ月間も退屈しないだろうか、船酔いしないだろうか、食事は飽きないだろうか、服装も特に女性では心配だ、外国船との違いはどうだろうか、航空機を利用した海外旅行との違い、すなわち、クルーズ旅行の魅力はどこにあるのだろうか、旅費がいかにも高そうだ等々が想定される。しかし、これらは杞憂だったことを以下に述べたい。

① 自分、同伴者、家族、親戚などの健康状態は？

特に高齢な親の介護などをしていれば実質的に困難である。最悪の事態を想定し、航海途中で下船・帰国せざるを得なくなってもよいように、しっかり保険に入った。

② 3カ月間の乗船で退屈しないか？

航海中は毎日朝から晩まで多彩なイベントがある。早朝6時30分からのモーニングコーヒー&ティーに始まり、体操、朝食、9時から各種のイベントプログラムがスタート。昼食後13時30分から午後のイベントプログラムがスタートし、14時からアフタヌーンティー、18時30分からのタ食後20時30分からメーンショー、その後ダンス、カジノ、ナイトシアターと続く。

具体的なイベント&エンターテインメントにはカルチャー教室（パソコン、ダンス、ペーパーアート、ブリッジ、アートクラフトイメージアップ、デッキゴルフ、水墨画、囲碁、水彩画、麻雀など）やショー、音楽（シャンソン、オペラ、フルート、声楽、サックス、ラテン、チェロ、ハワイアンなど）、講演、演芸、古典芸能（落語、講談、マジック、人形芝居など）などがあり、講師も途中から乗下船を繰り返し、延べ60人程度が参加した。

この他7回のテーマナイト（アジアンナイト、オレンジナイト、仮装パーティー、ラテンナイト、ハワイアンナイト、ジャパニーズナイト、ロイヤルブルーナイト）が開催された。加えて、乗客参加型プログラムとして、かくし芸大会、2回の盆踊り大会と運動会、5回のビンゴゲーム、3回の船長主催のカクテルパーティー、赤道祭、餅つき大会、八点鐘、汽笛なども準備された。

これに対し、乗客のアクションは、これらの船内イベントに参加する、寄港地での有料のオプショナルツアー（以下、OP）に参加する、宿泊を伴うオーバーランドツアー（有料）に参加することで、もちろん全く自由に行動することも可能である。

③ 船酔いしないか？

横揺れ防止装置（いわゆるフィン・スタビライザー）が設置され、コンピューターにより揺れが抑えられるように設計されている。かつ、揺れの少ない航路を選択しながら運航された。

4月から7月は台風もなく、航海にはベストシーズンである。途中、二番目の寄港地ポートルイス（モーリシャス）までのインド洋で波高1・5m、うねり2・5m程度を体験したが、太平洋、大西洋でも波高1m以下、うねりも

1・5m程度で問題がなかった。インド洋で2回船酔いになったが、薬を飲んで就寝すれば次第に身体が慣れることでもあり、その後は船酔いもしなかった。

居住した1階のステートルームは船体のほぼ中央に位置しているので、揺れも少なくエンジン音もあまり気にならず、しかも価格も一番安いので最初に部屋が埋まっていくとのことである。なお、90日間の旅行中、傘が必要だったのはわずか1回（メキシコのチェチェンイッツァ遺跡観光）であった。

④ 食事はおいしいか？飽きないか？

にっぽん丸の食事はおいしいと定評があり、航海中二度と同じメニューは出さない。食事は朝食、昼食、夕食、夜食に加え、6時30分からのモーニングコーヒー、10時と3時のおやつを加えれば7回ある。朝食の選択肢は3つあり、軽めのアメリカンブレックファースト、和食のフルコース、洋食のバイキングである。昼食は麺類が中心で副食も数品付く。夕食は和食と洋食がほぼ3対1で和食が多い。和食は前菜から始まるフルコース、洋食もオードブルから始まるフルコースである。

⑤ 服装が堅苦しそうで心配、準備する洋服も多そう

日中は気楽な服装でOKである。ドレスコードは夕食から就寝までで、航海中フォーマルは4回、スマートカジュアルは6回で、その他はカジュアルであった。特に女性は準備する洋服が多くなってしまうが、持ち込む数量には制限はないのでその点は安心である。

⑥ 外国船との違いはいかが？

外国船での経験は2回（6泊のアジアンクルーズと10泊のアラスカクルーズ）しかないが、地中海クルーズやカリブ海クルーズの客船は、概して10万トンクラスの大型船が多く、しかも乗客は国籍も多様で人数も多い（2000人～2500人）。

一方、日本の船は飛鳥Ⅱでも5万トン程度（にっぽん丸は2万トン程度）と小振りで乗客数も少なく、しかも今回は全員日本人であった。

したがって、日本人特有のきめ細かいサービスを受けることができた。居住した部屋にはシャワーが設置されていたが、専らサウナ付の大浴場を利用した（シャワールームは荷物や土産品置き場）。

⑦ クルーズ旅行の魅力は何か？航空機を利用した旅行との違いは何か？

まず、荷物の煩わしさからの解放である。船旅では荷物の重量制限もなく、詰める荷物で頭を悩ませることもない。宅急便を利用すればダンボール箱も利用できるので、荷物を詰めるのも短時間でできる。

第二に、移動が楽なので、心身の疲労がなく身体に優しく疲れない旅である。時差も就寝前に一時間ずつ調整するだけでよく、時差も感じない。

第三に、海外でも日本食が中心の食事を楽しむことができる。

第四に、出入国審査が簡単である。一人一人の対面審査は二度だけでしかも簡単であった。アラスカクルーズで経験したアンカレッジでの入国では、顔写真撮影、両手の指紋撮影と念入りな審査があり、手間取ったのに比べればボストンでの入国審査は簡単そのものであった。その他の寄港地では、船側で乗船客のパスポートを預かり、一括して代行審査をしてくれた。

第五に、船からでないと見ることができない景色を身近に展望できたことである。サントリーニ島、アマルフィ、パナマ運河の通行などは特に印象的であった。

第六に、90日間という長期間の乗船と少ない乗客のお陰で、船内イベントを通して乗客やエンターテイナー、乗組員と知り合いになれたことである。

（3）トピックス

① 出港後7日目に正中を体験した。これは太陽が最も高くなる緯度（赤緯）が船の緯度と同じになるときに太陽が自分の頭の上に来る現象（左の写真）で、人が立てば影が足元に来ることになる。

② シンガポール駅からOPで、マレー鉄道特別仕立の12両編成のクラシックで豪華な憧れのイースタン&オリエント急行に乗車した。昨年7月1日に廃止になったシンガポール駅で、マレーシアへの入国手続きを済ませてからジョホールバル駅までのわずか45分の旅であったが、昼食時はフランス料理のフルコースを食した（左の写真）。

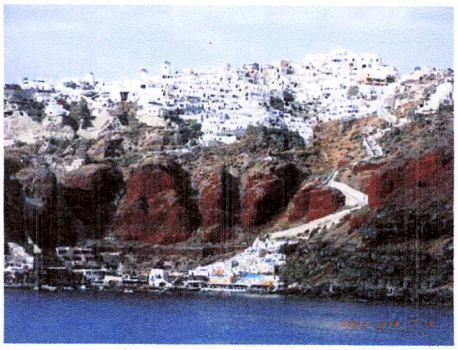
③ 長期クルーズでは、毎朝8時に乗客の希望者は操舵室で「八点鐘」といわれる鐘を8回たたくことができる（左の写真）。その後、船長が5分間程度航行中の海の状態や海域、海にまつわる諸々の説明をしてくれた。加えて、別途アフリカ沖を航行中に10秒間程度であったが「汽笛」を鳴らす機会を得た。これも得がたい体験であった。

④ 船内のカルチャー教室の一つであるコントラクトブリッジのレッスンが開かれた。講師は日本のコントラクトブリッジのプロの草分けである黒川晶夫先生で、厳しくも楽しい一時であった（次ページ1段目、右の写真）。

⑤ ケープタウンで、喜望峰とケープ半島の一日観光OPに参加した。世界の海岸線の中で最も美しい岬といわれるケープ半島と、アザラシ2000頭が生息するドイガー島を

小型船から間近に見学し、アフリカペンギン3000匹の生息地として知られるボルダーズビーチを見学した（左の写真）。

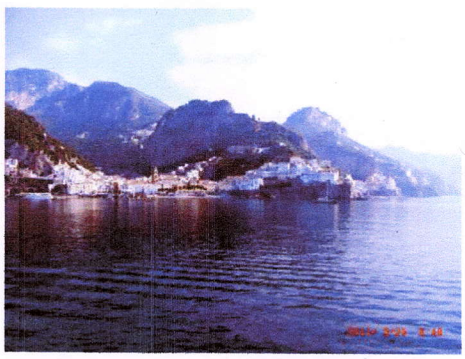
⑥ ケープタウンから50km南へ延びたケープ半島の突端にある美しくも荒々しい喜望峰をOPで訪れた（次段右の写真は、ケープオブホープから眺望した喜望峰）。喜望峰がアフリカ大陸の最南端といわれることがあるが、実際には東南東へ150kmのアガラス岬が最南端である。



⑦ サントリーニ島は、数あるエーゲ海の島々の中でも特に人気の高い島である。赤茶けた断崖が壁のようにそびえ、その上に雪のように輝く白壁の家々とのコントラストが魅力の島である（左の写真は、サントリーニ島の上陸地点）。

イアの町とワイン博物館を巡るOPに参加した。イアの町はサントリーニ島の北端に位置する小さな町であるが、白い壁に青い屋根の教会や民家が段々に連なり、落ちついたメルヘンチックな雰囲気を醸し出している。通りにはみやげ物店、アートショップ、カフェなどが立ち並んでいる。

⑧ 中世に隆盛と栄華を誇ったアマルフィ（イタリア）は、その海岸線が世界一美しいといわれる世界遺産である（左の写真）。緑豊かできらめく海へと張り出した地形、特徴ある芸術と建築の宝庫であることから、世界で最も有名な町の一つである。



⑨ パナマ運河（次段右の写真は複線の同運河）は、長さが約83kmで閘門により水量を増減させ水位を合わせ通航するシステムにより機能し、大西洋と太平洋をつないでいる。1914年に運行を開始した。

カリブ海側から通るとき、ガツンロックで三つの開閉式閘門により一気に26m上がりガツン湖と同じ高さになってガツン湖を渡り、ペドロ・ミゲル・ロックで9m下がり、ミラフローレスロックの二つの閘門で17m下がり太平洋と同じ高さになる。約7時間かけて通過したが、つぶさに観察することができた（左の写真は閘門）。

⑩ 赤道祭に出演した。小学校の学芸会以来の芝居出演である。長期クルーズでは恒例の行事とのことで、赤道祭は全ての海の支配者である龍王様に、北半球と南半球をつなぐ赤道通航の際、船の無事を祈って献上する芝居である。その芝居に北海王の役で出演した。北海王は北太平洋、北大西洋、北氷洋を治めている王様である。練習が短期間であったこともあり、アドリブの連続で大喝采を浴びながら、約50分の芝居を終えた（左の写真は赤道祭出演者の揃い踏み。中央緑色の衣装を着たのが私）。

追記

費用についてご参考までに紹介いたします。半分くらい参加（ほかは自分で行動）したOP代18万円を含め、一人当たりの船旅料金は308万円。なお、アルコールや土産代は含まれておりません。

ドイツ　あちらこちら

本郷台分会

大島　亨・東子

旅の滑り出しは・・・

昼間だが人通りの少ない大通りで、反対側の歩道から4車線の車道を横切って、大きな男がこちらに向かって近づいてきた。通り過ぎるのだろうと思っていたら、私に向かって何やら声をかけながらどんどん近づいてくる。私は危険を感じて大声で「オーノー！」と叫んだ。すると大男はすごすごと通り過ぎて行ってしまった。

やれやれ、ドイツ到着の翌日からこれでは前途多難だと思ったが、のちに、駅の通路などでも同様の光景を目にした。そこで分かったことは、どうやらドイツの物乞いは教会の入り口に座ってお恵みを待っているのではなく、自分から出向いていくようである。

そして、自分の窮状を切々と訴える。相手もそれを3分以上もじっくり聞いてから、窮状に応じて？しかるべき金額をさりげなく握らせているようである。これがドイツ流のようだ。

それにしても、昨日は成田からマインツのホテルまでスムーズにたどり着いた。午後5時40分にフランクフルト空港到着後、動く歩道から入管を15分で通過、スーツケースを受け取ってそのまま空港ビルの3階通路を通って、開通して間もないドイツ鉄道高速列車のホームに向かう。途中ドイツ鉄道の旅行センターを見つけ、ユーレイルパスをバリデーションしてもらうと、あと5分でマインツ行きが到着するとのこと。ホームに急ぐと、ちょうど高速列車が滑り込んできた。飛び乗って15分でマインツ到着。駅前のホテルに2～3分でチェックインできたので、空港到着から1時間程度でホテルの部屋まで到着できたようだ。

ドナウ川源泉へ

早朝7時56分にフライブルクを立って、8時44分に黒い森の真ん中のトリーベルク駅に到着。駅前は何の施設もなく、バス停がぽつんと立っている。時刻表を見るとバスは1時間以上来ない。ホテルに電話してタクシーの迎えを頼む。やってきたのは、快活で手早くスーツケース2個を車のトランクに収めた若者の運転手だった。9時20分ホテル着。荷物を部屋に収めて街へ出る。森の中の小さな町だが、夏冬のシーズンにはリゾート客であふれるようだ。本場の産地だけにカッコウ時計の店がたくさん並んでいる。近くの店で昼食のパンやハムやサラダ、果物、ケーキなどを買って部屋のベランダから通りを眺めながら昼食をとる。

午後からは、黒い森博物館で特異なカーニバル衣装と仮面などの民族伝統の展示物を見学した。また、ドイツで一番落差の大きい（にわかには信じがたいが）滝を見物した。確かに下からは数十メートル登って行った。この流れがやがてネッカー川に合流するものと思われる。

ホテルに帰ってからが、本日の最重要事項が待っている。あすのドナウ源泉探訪ドライブのタクシーを確保し、代金を交渉することだ。ホテルは町の大通りに面した市庁舎前の4階建てビルの3～4階で、全部で10室の小さなホテルだ。経営者は30代の女性で、ベッドメーキングから受付、朝食の支度とすべて一人でやっているので常に忙しい。

そこで、こちらから朝食を準備する調理室まで出向いて、明日の用件を手短に説明して頼んだ。

すなわち、明日タクシーでドナウ川の源泉地域を一周したいこと。タクシーは午前中の貸切とすること。代金はどれくらいかと聞くと100ユーロくらいだというので100ユーロ以内を希望すること。できれば、今朝のタクシーの運転手が良いこと。

夕食前に返事が来た。朝の運転手は、午前中の定例業務があって不可。別のタクシーが来る。英語は話せないかも。その他の条件はオーケーとのこと。いよいよ明日はドナウ源泉だ。早寝しようと思うが気分高揚。今夜もビールを1リットル飲んだ。

朝だ。なんと雷と稲光だ。大丈夫か。朝食を終わると雨が止んだ。9時。通りを見下ろすとタクシーが来ていた。いよいよ決行だ。

カッコウ時計の家

運転手は60代後半と思われる地場のおっさんだ。早速、あらかじめ用意したドイツ語の訪問順の訪問先リストと訪問先の写真入りの源泉地域一周のドライブコースの地図を渡して説明する。「あー」とか「うー」とか言いながらコースを指でたどり、理解したようだ。

出発後5分で第一訪問場所のカッコウ時計の家に着く。さらに5分後に第二のカッコウ時計の家に着き、それからかなり走って第3場所のブリーク川のドナウ源泉に着く。本当のドナウ源泉を見て、それを証明する石碑にはめられたプレートを読みながら感慨にふける。

黒い森山中のドナウ川の源泉

これは順調だ。これなら予定より早く一周するだろうと思っていた矢先に予定がくるった。源泉から流れ出た若い小川を見るために指定した場所を、途中から見つけられなくなり、長時間走り回る。ここだここだと地図を指さしても、老眼らしく眼鏡を取り出したがよく見えないらしい。

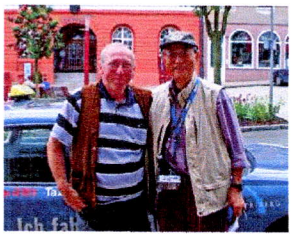
やっと、農家の人を捕まえて聞いてみると、源泉から流れ出た本流に合流する支流の一つを途中からさかのぼって

いたことが判明した。だいぶ横道にそれて走っていたが、ここから再び、本来のコースを走り始めた。そして、ほぼ予定した訪問場所を一周してホテルにたどり着いた。12時30分であった。

そこでタクシー代の交渉である。こちらは100ユーロといっても、予定通り回れば120ユーロ程度は払おうと思っていたが、だいぶ横道を走ったのは事実である。

「ホテルからは100キロと聞いているが、それでどうか」と聞くと、運転手は赤ら顔をやや紅潮させて、「そうはいっても1時間も余分に走り、距離も200キロ走ったので、150ユーロいただきたい」と同じようなことをとつとつと繰り返す。

距離は100キロも走っていないと思ったが、当初予定の5割増しくらいは走ったようなので、日本の相場から見ても割安でもあり、おっさんの熱意にも負けて、先方の言い値の150ユーロを支払うことにした。



案内してくれた運転手と

おっさんはご機嫌である。私はといえば、はるばる訪ねてきた2つのドナウの源泉を見ることができたし、おっさんが自主的に案内してくれたヨーロッパ分水嶺の標識のある峠や白川郷のような黒い森の農家の伝統的な住居、今後おそらく日本人が行かないであろうブレーク川の支流の小川など予定外の風景までも楽しめたので、私も満足であった。

バンベルクを歩く

今回の旅行計画を作成している中で、いくつかの理由でどうしても行ってみたい街が出てきた。バンベルクである。

7時45分にニュルンベルクを出て、9時33分に着いた。駅前は新市街が広がっており、旧市街はマイン・ドナウ運河を渡った先にある。目的の一つである「大聖堂へ」と言ってタクシーに乗ると10分足らずで着いた。

大聖堂の見学は9時30分から可能だが、中に入るとまだ誰もいない。暗くてほとんど何も見えない。ほどなく若い聖職者が2人で観光客の受け入れ準備をはじめ、ドイツ人の団体が入ってきた。

明かりもいくつか点灯された。大聖堂は千年ほど前、皇帝ハインリヒ2世によって建造されたとのことで、かのリーメンシュナイダーの彫刻で覆われた皇帝と妃のりっぱな棺が置かれていた。また、見上げると太い柱の上方に凛とした「バンベルクの騎士」の像が我々を見下ろしていた。祭壇や壁面に飾られた彫刻も素晴らしい。なにより大聖堂自体が堂々たるロマネスク建築の教会であった。

ドーム広場を挟んで向かい側に、司教兼バンベルク領主の宮殿がある。司教領主の宮殿というのは、ヴュルツブルクやケルンのように、なぜ際限もなく立派になってみな世界遺産になってしまうのだろうか。単なる領主より集金力があったということか。中には入らず、庭のバラ園を通って外に出た。

そして2つ目の目的の山の上の修道院を目指す。途中はほとんど人通りはなく、古い石の建造物やドイツらしい木組みの家が連なっていて、素晴らしい散歩道だ。

城壁のような建造物が続いてから大きな門扉が現れた。中に入ると、広い敷地の中に壮大な構えの聖ミヒャエル修道院だ。だが、2つ目の目的はこの中にある修道院ビール醸造所（現在はビール醸造博物館）である。すぐ見つかるだろうとの予想に反して、まだ見つからない。たまに出会う人に聞くが同じところを行ったり来たりして、ようやく城壁のように連なる建造物の一部がビール醸造博物館だということが分かった。しかし、火曜日だというのにドアが開かない。たまに通る人に聞くと今日は休みだという。なぜだと聞いても分からないという。ほかの人にも聞いてみたが、答えは同じだった。推測するに、博物館の人は休館のため休暇を取った。そして他の人は、理由を聞かされていないのだろう。ああ、残念。せっかく博物館を見ようとバンベルクに来たのに。

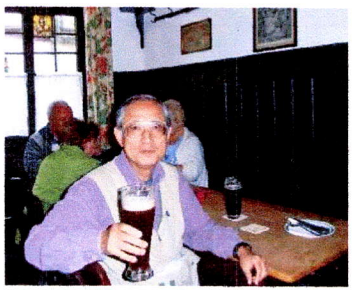
それでも修道院内をあちこち迷っているうちに分かったことは、この修道院の中には、博物館のほかにビヤガーデン、レストラン、病院、資料庫、大聖堂に匹敵する教会、研究施設などがあり、一つの社会を形成しているということである。中世には、これに加えて小麦畑やブドウ畑などもあり、十分自給自足できたのだろう。修道院は大したものだ（ビール博物館に関しては、帰国後も残念な思いがつのり、ひそかにホームページで博物館の展示物を見学した）。

博物館が休館のため、少し早いが第3の目的地に向かうことにした。バンベルクならではのラオホビールの醸造所直営のビアレストランである。

修道院の裏庭から近道を通って街に降りようとしたが、裏庭が大変広い。迷いそうになりながら階段や坂を下ってようやく裏門に出た。さてどちらの道を行こうかと思っていると、中年の街のおばさんが現れ、どこへ行くのかと聞く。店の名前を言うと、近くだから案内してくれると言い、5分ほどで着いた。

そこは、ヘラー醸造所直営のビアレストラン「シュレンケルラ」である。そしてお目当てのビールも「シュレンケルラ」というブランド。これはバンベルク特産のラオホビールを代表するブランドだ。

ラオホとは「煙」で、3年間乾燥させた地元のブナの丸太でビールの原料の麦芽を燻蒸して作ったビールで、そのためか色もダークである。



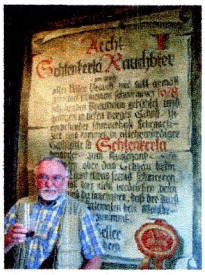
ラオホビールを飲む

小麦のヴァイツェンと大麦のデュンケルを注文する。特にヴァイツェンの生ビールは味が変化しやすいため、出来立てが最高である。両方賞味したが、やはりラオホ独特のスモーキーなうまさが後を引く。

店内は日本の居酒屋のよう

な作りで、1階だけで50人以上座れるが、12時前でほとんど客はいない。それでも先客3人との相席のテーブルに案内された。聞けば、先客はこの店の近くに住む夫婦とその隣のおかみさんとのことで、しばしばこの店で近況報告会をしているようだ。

店の入り口近くには、小さな丸テーブルの立ち飲み席があり、ここにも常連と思われる赤ら顔でビール腹のおっさんが、新聞片手にデュンケルを飲んでいる。これはいかにもという感じなので、写真を撮らせてくれないかと言うと、いいともという感じでここがいいだろうと言って、自分からこの店の由来を掲げた壁掛けの前でポーズをとってくれた。



立ち飲み席の常連客

やはりこの店は地元の客が多いようで、常連客の指定席に勝手に入り込んでしまったような気分もあったが、店の奥にある配送受付窓口では、世界各地にまで配送を受け付けているようだ。夕食用に500mlビンを2本買って店を出た。

第4の目的は、第二次大戦でも爆撃を免れた千年の旧市街を歩くことである。街の真ん中に川が流れているのは気持ちがいいものだが、かなりの激流のレグニッツ川の真ん中に旧市庁舎が立っている。なかなかの景観。

川の真ん中にある旧市庁舎

そこから川沿いを少し下っていくと漁業地区「小ヴェネツィア」がある。昔のクレーンが今でも保存されているので、ここから獲れた魚を水揚げしていたのであろうか。

これでバンベルクの街歩きは終わった。明日はミュンヘンへ移動するので早めにホテルに帰り、休養することにした。

最高峰に登るのは大変

朝6時に起きて、東の空を見る。雲の流れが速いが、晴れている。昨日は朝から小雨が降っていたので登山を見送ったが、今日はいよいよ最高峰ツークシュピーツェ登山を決行することにする。

8時ごろにミュンヘン駅に着き、昨日確認済みのホームの表示板を見ると、目指す列車の表示が出ていない。

ホームのサービスポイントで問い合わせると、この時刻の電車はないと言うばかりで、昨日入手した時刻表を見せても要領を得ない。

そこで旅行センターのファーストクラス窓口で聞いたところ、この路線は工事中で次の電車は8時35分ではなく9時12分で、しかも途中でバスに乗り換えるという話だった。ドイツ鉄道のシステムではバス停の場所は簡単にプリントできるのを知っていたので、プリントを依頼するとプリントはないが、駅前なのですぐ分かるという。

そこで、28番ホームで待つが発車時刻が近づいても電車が入ってこない。表示板にも表示がなく、これはおかしいと思って見回すと30番ホームに電車があった。急いで走っていくとホームにいた車掌がこれだと言う。また、アメリカ在住の中国人が、自分もガールミッシュ・パルテンキルヘンに行くが、この電車で間違いないと教えてくれたので、やっと目指す電車に乗れたと安堵した。

ファースト車両はさきほどの中国人夫婦以外はほとんど乗客がなく、それでも検札に来る車掌は手抜きなく検札してゆく。9時39分にバスに乗り換える駅に到着。乗客の列を駅員がバスに誘導する。なるほど、これでは乗車場所を迷うことはない。ドイツ鉄道の振り替え輸送バスが4～5台駅の横に並んでいて、乗客の列が順番にバスに乗車していく。私も3台目くらいのバスの後ろのほうに席を取り、出発を待っていた。そこへ、先ほどの電車の車掌が乗り込んで、乗客を見ながら後ろに進んできた。これは車掌も一緒にバスで移動して、次の乗換駅からまた車掌をするのかと思っていると、とうとう私の前まで来て黒いものを差し出した。なんとそれは私のめがねケースではないか。感謝感激、平身低頭。

山頂から山並みと湖を見渡す

予定外のバスツアーでドイツ南部の村々を巡って、10時11分に再び電車に乗り替え10時57分にガールミッシュ・パルテンキルヘンに到着した。ここから登山電車に乗り換え、12時30分に山頂に到着した。山頂は快晴で気温2度。遠くの山々やふもとの湖などを見ながらのビールはまさに気分爽快。

15時15分にアイブ湖に下り、再びバス乗り換えを経て、19時30分にホテルの駅に帰り着いた。

その途中の帰りの電車の中で、デッキにあるパンフレット入れのパンフレットを何気なく開いてみると、なんと、それは今日の振り替え輸送の予告パンフレットではないか。

前日にも確認し、当日もサービスポイントや旅行センターで問い合わせたのに、なぜ、このパンフレットが提示されなかったのだろうか。

振替輸送の予告パンフレット

しかも、パンフレットの時刻表をよく見ると、我々が乗った9時12分発の前に8時12分発があるではないか。朝8時過ぎにサービスポイントで聞いたときに、このパンフレットを開いてくれれば、8時12分発に乗って当初の予定通りに11時30分に山頂に立てたわけである。

この日は帰りに近くのスーパーでやきそば、白アスパラ、ソーセージ、ビールなどを買

って帰り、当初予定より1時間遅い夕食をとった。

ビールを飲みながら、今日の登山を振り返った。登山は楽だったが、ふもとに行くまでが大変だったことや、ドイツ鉄道では列車の運行部門と保線工事部門の連携が十分ではないと思われることなどを。

美術館は開館するか

これまでも海外旅行の際には、その国の主要な美術館に立ち寄ることを常としてきた。

ドイツでは今般、ミュンヘンのアルテ・ピナコテークが長い工事を終えてようやく再び開館し、また東西ベルリンの美術館が再編・新設された。そこで、今回のドイツ旅行の主要テーマの一つに美術館巡りを掲げた。

それもデューラー、クラナッハ、ホルバイン、リーメンシュナイダーなどルネッサンス期のドイツの画家、彫刻家を中心に見て回ることにした。その結果、文化フォーラム絵画館（ベルリン）、アルテ・ピナコテーク（ミュンヘン）、シュテーデル美術館（フランクフルト）など12の美術館を回ったが、どの美術館もまことに素晴らしい所蔵作品が展示されていて大満足であった。

アウグスブルクといえば、昔、フッガー家という金融業で財を成した大金持ちがいたが、世界史の教科書にのっていたフッガーさんの顔をご記憶であろうか。

私はその日、8時24分ミュンヘン発に乗り、9時1分にアウグスブルク駅に到着。駅前の通りをどんどん進み、二つ目の大きな交差点を右に曲がってフッガー家の銀行の前を通って先に進んだが、目指す美術館は見つからない。行き過ぎたと思い、銀行の手前まで戻ると、そこにきれいな建物があった。入口のプレートを見ると、いくつかある施設名のなかにバイエルン州立絵画館の名前があった。

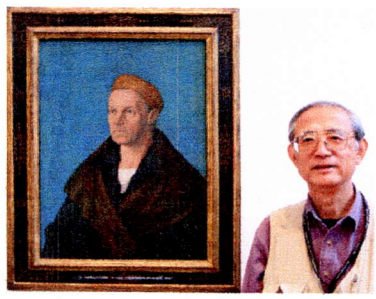
バイエルン州立絵画館

しかし、ドアは閉まっている。10時の開館まで少し散歩して戻ると、入口の大扉は閉まったままになっている。

変だなと思い、押してみるとドアは開いたので驚いた。右側のミュージアムショップの女性に絵画館を見に来たと言うと、近くにいた庭師のような男が担当の女性を連れてきた。早速私が彼女に、アルブレヒト・デューラーの「ヤコブ・フッガーの肖像」を見に来たというと、さあ大変という風な感じでとりあえず我々を宮殿の中（絵画館は宮殿の中にある）に案内し、立派な螺旋階段を上った広間に待たせた。しばらく待っても来ないので入口に戻ってみると、何やら切迫した様子で長電話をしている。ショップの女性は私を見ながらにやにやしている。担当の女性は二階に戻り、カギを取り出して大きなドアを開けた。まずこの部屋を見てくれという。これはベルサイユ宮殿の鏡の間の小型版で驚くほど豪華であった。後から分かったが、マリア・テレジアに財政支援していた銀行家リーベルトの宮殿で、落成祝賀舞踏会には、マリー・アントワネットも出席したらしい。ところが私は「デューラーはまだか」である。敵は何やら時間稼ぎをしている。そこへようやく担当の女性が現れ、「大変お待たせしました、さあどうぞ」と言い、先に立って案内をする。来館者は他に誰もいない。学芸員ガイド付きの美術館貸し切りデューラー鑑賞会となった。

そして、アウグスブルク出身のホルバインの傑作が数多く並ぶ部屋の先に、奥から2番目の部屋の正面の大壁面にただ一枚、アルブレヒト・デューラー作「ヤコブ・フッガーの肖像」が掲げられていた。

それは、厳しさ、意志の強さなど人の内面までも描き出すデューラーのまさしく傑作のひとつであろうと感激した。


ヤコブ・フッガーの肖像

ご対面まではだいぶ待たされたが、帰りには大満足で何度もお礼を言って絵画館を後にした。館長は最後まで現れなかったが、高価な芸術作品や文化財を所蔵している部屋の扉のカギは何らかの方法で取り出されたのだろう。めでたし。

おわりに

旅行に持参するものも年々変化しているが、今回、私が新たに持参したものはミニノートパソコン（ネットブック）、GPS、電気調理鍋などである。

パソコンの利用法として

① 家族とのメールや、いくつかの所属するグループから自宅のパソコンに入るメールへの返信
② 日本のニュースを見る
③ カメラで撮影した写真やビデオをパソコンに取り込み、保存する（さらにフラッシュメモリーにもコピーしておく）
④ 旅行のスケジュール、行動予定表や訪問予定先の資料を、訪問予定日付け順に整理して保存しておく（旅行資料は、プリントしたハードコピーも持参しており、毎日、当日の資料30枚程度をハガキ入れ用のクリアファイルに入れて、見ながら行動する）
⑤ ホテルの予約確認書を全日程分パソコン内に保管しておき、万一キャンセルの場合は、そこに記載のキャンセル用アドレスにメールすればよい体制をとった
⑥ カメラや携帯その他の持参品の取扱説明書をすべてダウンロードして保管した
⑦ 今回の旅行に関係すると思われるアドレスをリンク集にして保管しておき、必要に応じて短時間で調査できる体制をとった

などがあげられるが、このサポート体制のおかげで、夕食後ホテルで簡単に翌日の下調べができ、日々の予定が円滑に実行できたように感じている。

ガイドブック片手に

ベルギー王国

食べ歩きの記録

（'07.06.04 ～ '07.06.18）

戸塚分会

岡谷繁興

旅先の街のどこの店で食事をしたらよいか？

これが実に難しく、とりわけ海外旅行の場合、二度と訪れることはないであろうこの街に来たのだから、ちょっと変わった店、有名な店、友達などに自慢できるような店で食事したいと考えるのは誰しも同じだ。

情報源は？

２００７年の夏、ベルギーを訪れたとき、レストランについてあらかじめ調べてから出発したが、その情報源は、かの有名な「地球の歩き方」と、これも知る人ぞ知る“旅名人ブックス”シリーズの「ベルギー美食紀行」だった。

「地球の歩き方」に代表されるガイドブックは、情報量が少ないうえ、情報の質もあまり良くないと言う人もいるが、玉石混交のウェブサイトの情報を除けば、我々は「地球の歩き方」以外の情報源がないので、このガイドブックを頼りにせざるを得ないのだ。

また、ガイドブックなどを頼りにしないで、行き当たりばったり、良いと思ったレストランに飛び込めばよいではないかと言う人もいる。

確かにそのとおりだが、限られた時間と予算で旅する私としては、初めての街で食事をする店を探してうろうろするのは時間がもったいないし、懐の心配もある。

そんなことを思って、あらかじめこの街ではこの店で食事をしようと心に決めて出かけた。

レストランを探す

ところが、いざお目当ての店に行こうと、ガイドブックの地図を片手に初めての街を歩くのだが、そう簡単には目的の場所にたどり着かない。

店の場所を何人もの人に聞いて、やっとの思いでたどり着いたことが何度もあった。

こんなことなら、自分の五感を働かせ、そして第六感を頼りにして食事場所を選んだほうがよかったと思うことがあったのは事実だ。

レストラン選びは、私のようにあらかじめ調べてから旅に出るのもよいし、旅先で、この店は良さそうだという直感に頼るのもよいであろう。

旅する人の性格により、何から何まで計画を立てて行きたい人と、出たとこ勝負で旅をしたいと思う人の、二通りある。

計画が好きな人は、旅行計画を立てているときが至福の時であり、出たとこ勝負の人は、旅先でレストラン選びに一苦労するのを楽しむようだ。

結局、どちらのやり方でレストランを選ぼうが、旅の楽しさに変わりはないということか。

両替の実際

旅に出る10日前、２００７年５月23日、円をユーロに両替した。

横浜駅西口の三菱ＵＦＪフィナンシャル・グループの外貨両替専門店、ワールドカレンシーショップの換算レートは、１ユーロが１６３円66銭、これに１ユーロ当たり４円の手数料が上乗せされたので、私の財布の中の１ユーロは１６７円66銭ということになる。

１千ユーロ分の円を窓口の女性に払うと、「ユーロ現金€２００」と表書きされた封筒を５つ渡された。

１つの封筒の中身は50€札と10€札が３枚ずつ、５€札が４枚入っていた。

海外旅行に出かけるとき、どのようにしてお金を用意するかは人それぞれで、私は、知らない外国の街での両替するのは面倒だと思い、出発前に必要なお金の大部分をあらかじめユーロに両替した。

ただし、６月７日、現地で一度だけ銀行の窓口でみずほ銀行の国際キャッシュカードを使ってユーロを引き出した。

Ｃｉｒｒｕｓ（みずほ銀行はシーラスと称しているが、英語圏の人はサイラスと読むのだろう）マークがついたＡＴＭで引き出したユーロの換算レートは、１７０円84銭、この換算レートは、カード会社、ＶＩＳＡ社の手数料、約１円50銭と現地銀行の手数料が含まれている。

さらに、みずほ銀行の手数料２１０円が円価で私の預金から引き落とされたので、結局、１ユーロを手にするのに私が払った円は、１７１円68銭だったことになる。

横浜で両替した１ユーロは、１６７円66銭だったから、両替した日にちが違うので単純に比較できないが、両者にそう違いはなかったということになる。

リエージュに滞在した

ベルギー南部のフランス語圏であるワロン地方の中心都市、リエージュに住んでいる小野澤嘉秀・迪江夫妻の家に、私は友人と２人で２週間滞在した。

その間、リエージュを拠点にしてベルギー国内の観光地を訪れた際に利用したレストランのうちいくつかを紹介したい。

なお、小野澤夫妻のお宅には既に何組かのＬＳＹ会員がお世話になっている。

フランドルの“水の都”ブルージュのレストラン

“デ・フィシェリ”

De Visscherie

６月６日、中世の面影をそのままとどめるベルギー北西部のオランダ語圏であるフランドル地方の観光都市、ブルージュの街に観光に出かけた。

ブルージュとは“橋”の意味である。

リエージュ～ブルージュの距離は１９３㎞で、所要時間はちょうど２時間である。

東海道線では東京から静岡の少し先、漁港として有名な焼津までが１９４㎞であり、ほぼ同じ距離だ。ちなみに、焼津までの所要時間は３時間半である。

美食紀行の話が横にそれる

が、ベルギー国鉄の運賃は我が国のJR線のそれと比べて大変安い。

リエージュからブルージュまでの運賃は、レールパスと呼ばれる10回分の回数券を使った場合ではあるが、わずか1150円弱である。（私の1€は167円66銭）

一方、東京から焼津までの運賃は3260円もする。

ベルギー国鉄の運行路線図、時刻表、割引制度を含めての運賃表はLSYのホームページに載っているリンク集のページの中の「鉄道・ベルギー国鉄」であらかじめ調べ、メモ帳に書き留めてから旅に出立した。

話を元に戻し、ブルージュの街で食事をした店はガイドブックに載っている人気シーフードレストラン、“デ・フィシェリ”。

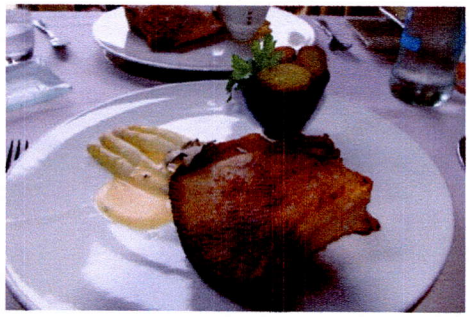
ところが、ガイドブックの地図を頼りに店を探してもなかなか見つからない。

そうなると当然、店がどこにあるかを人に聞くことになり、オランダ語はもちろんのことと威張ってはいけないが、英語もろくに話せない私たち2人は、道行く人に“デ・フィシェリ”と連呼するはめになった。

それでも何とかなるもので、3人か4人目に尋ねた人が指差したのでそちらの方角を見ると、なんとお目当てのレストランはすぐ目の前にあるではないか。

ちょうどお昼時で、大勢の観光客がレストランやカフェにいるものとばかり思っていたのに、この店の客は数組しかいないうえに上品で静かな雰囲気なのだ。

これは高いぞと覚悟を決めてメニューを見てもさっぱり分からない。



一品料理・タラ（鱈）名物の白アスパラ添え

ガイドブックの予算欄には、コース料理が、20～35€と書いてあったことを思い出しながら、注文したのは次のとおりである。

一品料理　34・5€
グラスビール　5・7€
水・・・・・　1・8€
合計、42€（約7千円）とチップだった。

ガイドブックに載っていた値段と比べて高かったけれど、一品料理でも前菜とパンとバターがついていた。

今日の高い昼食代は、私の財布を直撃したけれど、店員の物腰や店の雰囲気は大変良く、料理も絶品・美味だったので満足して店を出た。

ダイヤモンドで有名な港町、アントワープのレストラン

“デ・フォワイエ”
De Foyer

6月8日、オランダ国境までわずか30㎞に位置し、ベルギーの首都、ブリュッセルから北へ45㎞のダイヤモンドと画家ルーベンスで有名な街、アントワープの観光に出かけた。

リエージュ～アントワープの距離は119㎞で、所要時間はちょうど2時間6分である。

ブルージュまでの193㎞を2時間ちょうどで走ったのに対し、アントワープまではわずか119㎞なのに2時間あまりかかるのは、ブルージュ行きの列車がICであるのに対して、アントワープ行きの列車はIRであるから。

ICとは、
Intercity 快速列車
IRとは、
Interregio 都市間急行
「地球の歩き方」の日本語訳の適否は別として、急行列車より快速列車のほうが早く走るということだ。

なお、ベルギー国鉄の列車には座席指定料金と快速・急行列車料金の設定はない。

東海道線では東京から三島までが、121㎞であり、リエージュ～アントワープ間とほぼ同じ距離だ。

ちなみに、三島までの所要時間は2時間5分なので、我がJR線は、ベルギー国鉄と同じ時速で走っていることが分かる。

運賃について彼我を比べてみると、東京・三島間のJR線の運賃が2210円に対して、リエージュ～アントワープ間のベルギー国鉄の運賃は2400円だ。

ただ、私たちは高齢者割引切符（Senior Ticket）を使ってアントワープへ行ったので運賃はわずか4€、670円ですんだ。それも往復である。

いかにベルギーが高齢者を大切にしているか、国鉄運賃の優遇制度から推し量られ、羨ましく思ったのである。

参考に、この割引切符は午前9時過ぎに乗る列車から有効で、ベルギー国内ならどんなに遠くへ行っても往復で、4€、670円である。

駅の窓口で切符を買うとき、駅員に、「シニア」と一言声をかけると、パスポートの提示を求められることなく、私の顔を見ただけでシニア切符を売ってくれた。顔パスでOKとは複雑な心境の私である。

また脱線してしまったが、話を元に戻すことにすると、アントワープのブーラ劇場の2階にある豪華な内装の店としてガイドブックに紹介されていた“デ・フォワイエ”で昼食をとると決めていた。

リエージュを発車した列車は、外国映画で見たことがある、これぞヨーロッパの駅といった感じのアントワープ駅に着いた。

この駅は20世紀初頭に完成し、ベルギーの重要文化財に指定されている。

私たちは“デ・フォワイエ”を探し始めた。

私が方向音痴なせいか、お目当てのレストランが見つからない。

ガイドブックの地図にはすべての道路が書いてあるとは限らないのに、ついうっかりして何本目の道を右に曲がってというふうにやると目的の場所にたどり着けない。

外国で地図を頼りに歩く場合は、通りの名前を目当てにすればよいのであるが、当然のことながら、ガイドブックにはすべての通りの名前は載ってないし、運よく通りの名前が印刷されていても、字が小さいうえに、アルファベットで長々と書いてある通りの

名前は著しく読みにくいのである。

やはり人に聞くのが一番よいとばかり、歩いている人を捕まえて道を尋ねると、身振り手振りで教えてくれるためもあるが、必ずしも正しい答えが返ってくるとは限らない。

それでもなんとかして目的の店、“デ・フォワイエ”にたどり着いたとき、喉は渇くしお腹は空くしで、ふらふらになっていた。

このレストランは市立プーラ劇場の2階にあり、劇場特有の天井が高い室内で、豪華な雰囲気の店である。

ガイドブックには、エビのパスタが12€、ディナーでも20～25€と書いてあるので懐の心配はしなくてもよい店である。

“デ・フォワイエ”のテーブルついたのは午後1時。客の入りはまばらで、中年の品の良い女性が1人と女性同士の客が数組だけだった。

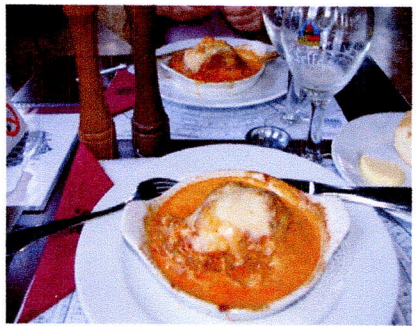
男性の給仕が注文を取りに来た。一瞬の緊張が私の体をこわばらせる。

メニューに書いてあった、Lssagnaの文字を見つけて一安心。ラザニアと給仕に告げ、あわせて、レフ・ブロンドと言うと通じて、Leffe Blondeがテーブルに運ばれてきた。

レフ・ブロンドとは、1千種類以上あるといわれるベルギービールのブランドの1つで、アルコール度数が若干高い、いわゆる修道院系のビール。カフェで飲む時の値段もほかのビールと比べて高めであるが、コクがあって美味しいので旅行中しばしば飲んだものである。

注文したのは次のとおりである。

ラザニア　9・75€
ビール　3・2€
合計12・95€（約2200円）。



美味しかったラザニア

ベルギーの首都・ブリュッセル、アールヌーヴォーの店“ファルスタッフ”Falstaff

6月14日、リエージュから列車に乗り、小便小僧の像で有名なベルギーの首都、ブリュッセルの観光に出かけた。

ブリュッセルには小便小僧の妹の像もあるが、あまりにも品がないと言われているそうだ。しかし、せっかく遠い日本からはるばるブリュッセルにやって来たからにはと思い、妹に会いに行ったところ、妹の像は鉄格子の向こうに鎮座していた。

実は、妹の像はガンやエイズ撲滅の研究の助成金を得るための絵葉書に描かれて販売されているとのこと。

リエージュ～ブリュッセルの距離は104kmで、東京・熱海間の距離とまったく同じである。

リエージュ～ブリュッセル間は、1時間に2～3本の列車が運行され、所要時間は列車にもよるが、1時間前後である。

前例にならって、JR線と比べると、東海道線に乗ると熱海までの所要時間は普通列車で1時間55分、快速列車でも1時間34分もかかるのは、東海道メガロポリスを走る東海道線は途中停車駅が多いから仕方がないところだろう。

ちなみに、リエージュ～ブリュッセル間を1時間弱で走る列車が途中で停車する駅の数は、わずか2駅である。

美食紀行が鉄道紀行になってしまったが、本題のブリュッセルのレストランの話に戻ろう。

今日の昼食はここで食べようと決めていたお目当ての店、“ファルスタッフ”は、世界遺産として知られる、グランプラス（Grand Place）の近く、証券取引所の横にあり、アールヌーヴォー様式の店として有名である。

ブリュッセル観光は今日が3日目で、いくぶん土地勘があったこともあり、“ファルスタッフ“はいとも簡単に見つかった。

この店は、ヨーロッパの飲食店によくあるように、道路に面する歩道にテーブルが置いてあり、そこはカフェとして営業し、建物の中はレストランとして営業していた。

私たちは、ガイドブックに書いてある、ファルスタッフがアールヌーヴォーのレストランとして有名との文句に惹かれてこの店に来たのだから、当然、レストランを選択して建物の中に入る。

時計は12時を少し回ったばかりなのに、客は我々2人だけ。

有名な店だから混んでいるかと思っていたので少々拍子抜けの思いだった。

メニューから何か注文しなければならない緊張した一瞬を迎えても、置かれたメニューはどうやらフランス語とオランダ語のようで、さっぱり分からない。

ベルギーの公用語は南部のワロン地方で話されるフランス語と、北部のフランドル地方で話されるオランダ語、それと、ごく一部ではあるがドイツ語の3言語である。

ブリュッセルはフランス語とオランダ語の併用地区で、駅名の表示もこの2カ国語で書いてあるし、レストランのメニューもこの2カ国語で書いてある。

あいにくフランス語もオランダ語もさっぱりの私たちは困ってしまった。

そうこうしてメニューと睨めっこをしているうちにはたと気がついたことがある。

そうだ。“今日のランチ”があるはずだ。

そう思ってメニューをよく見ると、7行にわたって順に書かれた文字が目に入り、今日は木曜日のはずだから上から4番目の文字を指差せば恥をかかないことに思い至ったときはかなり嬉しかった。

日本のカレンダーは横書きの場合、日曜日を左端に書く、すなわち日曜日から始まるものが多いが、ヨーロッパでは、例外はあるにしても、一週間は月曜日から始まることを知っていたので、木曜日は当然上から4番目になるわけだ。

リエージュの家に置いてきた鞄の中にある、JTB社発行の、「4カ国語自遊自在・ヨ

ーロッパ編」には、曜日と月の名前が一覧になって載っているので、その本を持って歩いていればこんな苦労をしなくて済んだのにと思っても後の祭りであった。

ちなみに、フランス語で木曜日は、jeudiである。

注文したのは今日のランチであるが、料理の名前は分からない。

食べ歩きの記録

ランチ　９・５０€

ビール　４・２０€

合計13・70€（約2300円）。

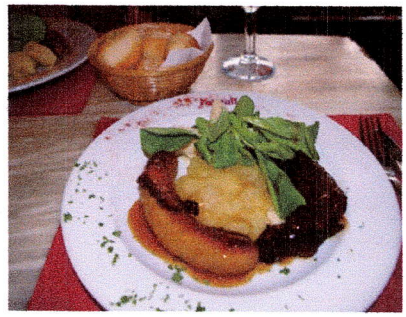
これまで3軒のレストラン探訪の様子を書いてきたが、外国で食べ歩きをする際には、行きたいレストランを探して行き着くまでが難しいことが分かった。

日本から持参したガイドブックの地図は役に立つが一部不正確な記載があることを頭に入れて歩くことが望ましい。

一番よい方法は、まず現地の観光案内所で地図を手に入れ、地図に書いてある通りの名前を頼りに目的の店を探すことだ。

理想的なのは、現地に住んでいる日本人に、地元のおすすめレストランに案内してもらうことだ。

だが、それはたまたまそのような人がいる場合に限るので、一般的な話ではない。



今日のランチ

私たちの旅の場合、リエージュに住んでいる小野澤夫妻が親切に連れて行ってくださった店が2軒ある。

ご夫妻と知り合いでなかったら、こんな幸運はなかったので、感謝感激である。

次の2軒は小野澤夫妻に案内された店である。

リエージュの気さくな居酒屋
店の主人は名物おやじ　ルケ

“カフェ・ルケ”

Cafe Lequete

リエージュ市内にあり、居酒屋の主人、ルケおじさんは名物おやじで、この店は地元の人と観光客でいつも満員になると「ベルギー美食紀行」に紹介されている。

カフェ・ルケの名物料理は、“プリュ”。プリュとは、大きいミートボールあるいは球形のハンバーグと考えればよく、甘めの美味しいソースがかかって出てくる。

これに、フリッツ（フライドポテト）を添えて食べる。

これを味わえば、もうリエージュ通になれるとは、「ベルギー美食紀行」からの引用である。

プリュとフリッツ

リエージュの秘密めいた
雰囲気の居酒屋

“ラ・メソン・テュ・ペケ”

La Maison du Peket

「地球の歩き方」にはリエージュのレストラン情報の記載がない。また、「ベルギー美食紀行」にもこの店は紹介されてない。

小野澤夫妻に案内されなかったら、“ペケ”の存在を知らずにリエージュを離れたことだろう。

そう思うと、あらためて小野澤夫妻に感謝の気持ちを捧げたい。

ペケとは酒の名前。アルコール度数は35度のリキュールで、原料は大麦とライ麦とのこと。

グラスに注がれたペケにバーナーで火をつけ、火がついた状態のグラスからストローでこの酒を飲むのだ。

甘みのある、とろりとした味の酒で、飲みすぎると足をとられる。もっとも、どんな酒でも飲みすぎれば足をとられるが。（左の写真はペケ）

最もトレンディな パソコン事情

西分会　小原　博之

最近のパソコンの進化は目覚しいモノがあります。基本ソフトそのものも、ウインドウズ98からMe、XP、ビスタ、セブンと目まぐるしく変りました。業界の覇者マイクロソフトもその足元から様々なウエブ上の会社が現れ、必ずしも安泰とは言われない事情が派生しつつあります。その代表的なものにグーグルやアップルがあります。その最もトレンディなものはクラウドサービスです。

（了）

スマートフォンの普及により、携帯電話の形態が大きく変化しつつあります。非常に便利なものですが、パソコンほどハードディスクの容量がありません。そこでクラウドの出現です。

クラウドサービスの基本は、ユーザーがインターネット上のどこかにあるハードウェアやソフトウェアを、どのパソコンでもスマートフォンでも同じようにいつでも利用できることです。

さらに、共有という他のメンバーがデータを見たり、編集したりすることができるようになりました。常にマイクロソフトの後塵を拝していたマッキントッシュ。また、単なる検索ソフトの開発者であったグーグルに先を越されてはならじと、マイクロソフトも遅れてウィンドウズライブを開発し普及しています。

ここで紙面の都合上詳しく述べるわけにはまいりませんが、クラウド（インターネットの向こう側にあるパソコン「雲」）の代表的なものをいくつか述べます。興味のある方は検索して、詳しく使い方など調べてみてください。

スカイドライブ（ドキュメントや写真を保存できる）

マイクロソフトが誰にでも使えるオンラインストレージとして、25GBの大容量を提供しているものです。これにはまずウィンドウズライブに登録してIDを取得しなければなりません。同時に、ホットメールの新しいメールアドレスを取得する必要があります。撮った写真をアップデートするには、ウィンドウズライブ フォトギャラリーから行い、ダウンロードはスカイドライブからできます。

Gメール（単なるウェブメールとしてでなく、7GBの容量をうまく利用できる。例えば動画を送るなど）

グーグルの持つウェブメールです。ワードと同じように使えるドキュメントから画像、動画などをアップロードしてメールで送れます。私はもっぱらこれを使っています。

ツイッターとフェイスブック（SNS ソーシャルコミュニケーションの代表的なもの）

ホームページやブログのように面倒な作業はいらず、簡単に意思の伝達ができるので便利に利用されています。政治家や芸能人などのページを見ることができます。フェイスブックはアフリカ諸国の民主化運動やアメリカの大衆運動の先鞭を付けたと言われています。

エバーノートとシュガーシンク（クラウドの中で代表的なファイル保管サービス）

エバーノートは何でも、どこでも、いつでも簡単にメモできることを謳ったクラウドサービスです。パソコンのみならず、スマートフォンからも取り込めます。容量は毎月60MBとやや小さいので動画もアップロードできますが、無理があります。

シュガーシンクは「オンラインストレージ」というカテゴリに分類されます。5GBと容量は大きいのですが、画像認識はなく、既存のファイルをそのまま保存します。

最近のクラウドは数え上げれば枚挙に暇がないくらいあります。例えば

ポゴプラグ（手持ちのUSBをサーバー化してクラウドで利用できるようにする）

自分専用のクラウドを構築することができます。これには1万円少々の機材を購入する必要があります。容量の制限はなく使えます。

キャッチノーツ（エバーノートほど高機能ではないが、動作が軽い）

無料で70MBまで使えます。ソフトをインストールする必要はなくホームページ上からメモ帳代わりに記入することのできるクラウドです。

ビッグローブゲートβ（ブラウザに機能が組み込まれ、スマートフォンなどと共有しながら使える）

まだ開発中とのことです。

ピカサ（picasa）

グーグルで提供している画像、動画専用のクラウドサービスです。共有、編集などができます。無料のサイトは1GBまで保存できます。旅先で撮った写真などを、ハードディスクが小さくて保存できないという場合に便利なクラウドです。画像をいろいろと加工できます。共有によってメールで送信することもできます。

グーグルクローム（グーグルで出しているブラウザ）

オープンソースなので、有志による拡張機能が充実しているので、ますます進化する可能性を秘めています。

企業向けのクラウドサービスには、セキュリティを更に強化した高度なサービスが続々登場しつつあり、多くの企業で採用されています。

グーグルが開発中の基本ソフト（以下、OS）は「クロームOS」といい、すべてクラウドで動かすようになっているそうです。普通のパソコンのように、ソフトやファイルを保存する機能がありません。グーグルクロームを通じて、クラウド上にあるソフトを動かしファイルを保存するのです。長所は凄く早い、スペックを最小に抑えられ、消費電力を食わない、パソコン本体が安く小型化されるなどで、今までのパソコンの概念がすっかり変わってしまいます。

このようにパソコン内のデータをクラウドに保存しておけば、パソコンが故障しても他のパソコンからデータを引き出せます。

ただし、注意しておかなければならないこともあります。どのサービスもデータ保存容量の制限や、対応フォーマットなどの制限があること、それと最も重要なのが、サービスを利用するためのIDとパスワードの管理です。これを忘れると利用できません。盗まれるとデータを保持できなくなり大変です。

どのクラウドでも無料の個人向けに言えることですが、データの保全は保証されるものではなく注意が必要です。

かく言う私もすべてを使いこなしているわけではありませんが、知っている範囲で最近のパソコンの傾向を述べさせていただきました。

◇◇ 編集後記 ◇◇

今号は、LSY活動報告の中で「面白かった」という評判の中から、二つを紙上アンコール版としてお届けします。

まず、昨年10月「新ニュージーランドの会」での本郷台分会・佐藤文炳さんのクルーズ。料金308万円とありましたが、1日当たりだと3・4万円で、これは通常の10日間旅行34万円と同程度で特に高価ということではない由。

次は、昨年9月「LSYサロン」での本郷台分会・大島亨さんご夫妻のドイツ旅行。最後の「パソコンの利用法」の具体的内容紹介は、「さすがパソコン同好会の優等生！」と感心するばかりです。

最近、携帯電話とスマートフォンの出荷台数が日本の人口を超したとか。これに関連して、西分会・小原博之さんに最近のパソコン事情を解説していただきました。

最後は戸塚分会・岡谷繁興さんの軽妙洒脱な文章で楽しく拝見できる「食べ歩き記」。

それぞれ、寄稿していただいた皆さん、本当にありがとうございました。

発行責任者 増渕建次郎
編 集・LSY編集委員会
（五十音順）（敬称略）
伊藤佐江子・岡谷 繁興
田部井 達